

6 章

存在のすべての次元で世界とかかわる ——フェレール氏らの「参与的提案」にインスパイアされて

木村 理眞

(コミュニケーション教育／英語・国際理解教育)

6月のフェレール氏のセミナー（大学院講義）では、通訳をおおせつかった。通訳という役柄上、体験ベースのセミナーで、肝心の体験の部分はほとんど体験していない。とはいうものの、セミナーを通じて私がインスパイアされたものは大きかった。

私自身は、様々な道筋——フェミニズム、マスコミ、地球放浪、国際環境NGO、大学講師など——を経て、現在、英語教育、国際理解、環境教育等にたずさわっている。ホリスティック・アプローチの実践とは、と現場で悩んでもいる。また、ここ20年は、北米先住民、ディープ・エコロジー、原生林保護運動、瞑想やマインドフルネスの実践等にたずさわってきた。そんな中、フェレール氏との出会いには、ことのほか動かされるものがあった。もう少し正確に言うと、このセミナーでは、フェレール氏が一翼を担う、欧米のトランスパーソナル界や「統合教育」界が、現在、提示している「世界観」とでも言うべきものの一端に、彼を通じて触れる機会となったのだが、その「世界観」を一瞥したことは、私に大きな安堵感をもたらしてくれた。フェレール氏ら一連のインテグラル（統合的）な研究者・実践者たちが誘う「統合的な世界」。その世界へ誘われてみて、私のうちに起きたことをレスポンスとして綴ってみたい。

フェレール氏と彼の同僚たち（たとえば、スペインのアルバレダ氏とロメ

口女史)が探求してきた世界については、本誌所収の二つの論文(1章、2章)に詳しい。一言で言うと、そこでは、「ボディ、ヴァイタル(本能/生命世界)、ハート、マインド、スピリット(意識)」と人間を五つの次元からとらえ、そのすべての世界にバランスよく根差した存在としての人間、という「統合された人間像」のビジョンが描かれている。この五つの世界が、それぞれの働きを補完しあい、等しくたがいを尊重しあう中で、統合的に成長する存在としての人間、である。そこでは、男性優位の価値は退けられ、女性原理に場を譲る。「マインド優位主義」(cognicentrism)を超えるというのも特徴である。アルバレダ氏とロメロ女史は、リトリートという形を借りて、このビジョンを実現するためのプラクティス(相互的身体瞑想 Interactive Embodied Meditation)を実践している。Embodied(身体化された)というだけあって、参加者同士が観想的に身体接触をはかっていくことがベースになっている。

セミナーでは、フェレール氏はこのプラクティスを順を追って誘導した。セミナーの七割が体験であった。その過程で私に明らかになっていったことは、彼らの提示しているビジョンは、私の生が抱えてきた葛藤や希求を包み込み、さらにその先のビジョンを指し示してくれている、ということだった。私一人が抱えてきた(と思っていた)葛藤と希求は、実は私個人のものではなくて、「人間の共通の体験」として全体の文脈の中に返してよいものだと、あらためて実感した。そこには、あたかも一滴のしずくであった私の生が、大海原に通じて、そこに溶けて全体に返っていくかのような安堵感があった。大袈裟に聞こえるかもしれないが、「今まで生きてきてよかった。この先も私たち人間は大丈夫だ」、そう思った。それは人類全体に対する大きな安堵感でもあった。この地球的危機の時代にあって、私は彼らの「統合的ビジョン」のもと、自分の生の葛藤が統合され、また希求ですら人類進化の過程の中で成就されていく、という直感を得た。

では、そもそも、私の「葛藤」とは何であったのか。

その主なところは、「身体=性」および「女性性」の抑圧から生じる葛藤

だった。一方、フェレール氏等は、今回邦訳された二つの論文の中で、繰り返し、「女性性、からだ、性」への敬意と礼賛をうたっている。ことに、人間科学の領域における「知の構築」という枠組みの中においてでさえ、彼は「からだ、性」という次元の貢献を、マインドや意識の次元の貢献と同様に尊重することを強調している。私はこの点に、なにより啓発され、また、安堵した。なぜか。

ここで自分史に触れることをお許しいただきたい。ふりかえるに、都心の郊外で育った60年代末から70年代初頭、日活ロマン・ポルノが活況を帯びていた時代。街角の看板に、女性が裸体で縛られているポルノ・ポスターを目にした瞬間のことは脳裏に焼きついている。当時10歳足らずだった私の世界の「平安」が一挙に崩壊した瞬間だった。「女性の身体は暴力にさらされ、貶められている」という社会の文化的視点を突きつけられたのだった。また、「女と男」という最も美しいベールに包まれたように感じられた（聖なる）世界が、地の底におとしめられた体験でもあった。以来30代までの30年、私は、自分のからだ、そして性への不安や緊張を抱えながら、やがては肯定感にいたる旅を辿ることになる。この旅は私の前半の生のすべてを要した。

商品化された性と隣合わせで生きる女性たちにとっては、この旅は、根源的な自己回復の旅であるといえよう。私自身は、そのためにアメリカに渡り女性学を学び、フェミニズム運動に参加し、また、北米先住民らと世界を走る「セクレッド・ラン」というムーブメントに走者として参加し、世界の大陸を何千マイルと走りつなぐという道筋をたどった。この間、先住民たちの大地の祈りの文化に身をあずける中で、性／聖、ボディ／スピリットということが、私のテーマにもなっていた。性の中に宿るゆるぎない聖性。永遠や「空」（くう）への通路としての性。それに対する礼拝の念は、私自身の大地・野生の体験が深まる中で、また、熟していった。ディープ・エコロジーの運動の中で、原生林に深く分け入ることもあった。そしてまた、「野生」は「野聖」であり、グレイト・スピリットの住まわれる場でもあった。「野生」の場に宿る叡智・知性・霊性には、頭を下げざるをえなかった。「野生」という場は、私たち人間の先輩であった。そんな中、私は原生林の保護運動

にもかかわった。原生林は聖なる場だから。原生林保護はスピリチュアル・マターであった。東京の大企業を相手に、アラスカやカナダ、豪州タスマニアなどの原生林保護を訴える仕事をあずかったこともあった。その後、ハコミというマインドフルネス・ベースの自己発見のアプローチに出会い、「自分をただ見ている」というシンプルなプラクティスがもたらす恩寵にあずかっている。

10年ほど前に「ホリスティック教育」というアプローチに出会った時には、その理念とカバー領域に共鳴し、自分自身の実践と探求はすべてその中に含まれるだろうと考えたほどだった。ただし、当時、すでに私の中の核心的な柱であった「性／聖／野生」という領界については、「ホリスティック教育」の枠組みの「場外」にあるもの、と考えていた。しかし、この度、機が熟して、「ホリスティック教育」の縁の一環として、フェレール氏らの「統合的教育の中の参与的提案」という視座に出会った。「参与的 participatory」とは、(その言葉からは想像しにくいかもしれないが)、「人間存在のすべての次元でかかわる」という意味である。そこでは、「性・からだ・本能」という、これまでは抑制すべき対象とみなされてきた次元が、対等に場を得て、その存在を認められている。

そこで、私は「自分の歩んできた葛藤と希求の先には、こんな道が準備されていたのだ」と安堵するのである。なにか一つを、たとえば性の領域を、タブー視したり恐れたりすることなく、他のすべてと同様に等しく見つめている参与的視点。その視点があるだけで、私の呼吸がやわらかくなる。ただし、「からだ・性・本能」の領域は、言うまでもなくパワフルな衝動と直結もしている。この領域で人が意識的になっていくには、今後のプラクティスの深化が欠かせないであろう。

次に、彼のセミナーの中で、印象的だった点を二点加えておきたい。

フェレール氏による今回のセミナーは「身体を通したトランスパーソナルな探究」(Embodied Transpersonal Inquiry: A Participatory Approach to Integral Education)というテーマであった。彼の論文、とくに(アルバレ

ダとロメロとの共著)「インテグラル・トランスフォーマティブ教育——参
与的提案」(Ferrer et al., 2005)の中で、フェレール氏は、ボディの知を引
き出す方法として、「折衷主義」に陥らずに、トータルにボディとかかわり、
「知の構築」において、ボディの声に寄りそって聞いていく、ということの
重要性を強調している。これは、単に「今日のセミナーをまずは太極拳から
始めましょう」という折衷主義的アプローチとは異なる、とフェレール氏は
明確に線引きをする。ボディや性の次元に宿る知恵を、知の構築のための「ウ
ォームアップ」として使うのではなく、マインド・意識の対等のパートナー
として、リスペクトして引き出していく、というものである。その具体的方
法として、前述した通り、彼はスペインのアルバレダ氏とロメロ女史の開発
した「相互的身体瞑想」(IEM)を用いる。この具体的方法については、「変
容的教育にふたたび火をともし」(本誌、2章)、あるいは、今回の日本人の
論考(村上祐介氏、吉嶋かおり氏)に詳しいので、ここでは詳細は省く。

IEMでは、単にマインドの領域だけではなく、からだ全体、人間存在全体
に宿る知恵に耳傾けようとしている。たとえば、「女は子宮で考える」とい
うフレーズがあって、女性の「非論理的な」思考を批判する時に男性が使う
常套文句でもある。IEM流にこれを言い換えると、「そうだ、女たちよ、も
っと子宮で考えよう!」と呼びかけているのである。マインドだけが「知」
を司っているというのは傲慢である、とフェレール氏は繰り返した。マイン
ドのような巧みな計算をしない、私たちのハートやボディも主役になって、
人間に関するinquiry(探究)に参画していく、という試みが、IEMを使っ
たフェレール氏の統合教育における主題である。

もう一点は、フェレール氏が推奨している、協同探究(Cooperative
Inquiry)というアプローチである。今回のセミナーでは、時間の制約から
協同探究の実践はできなかったが、グループで一つの共通の問いを立てて、
IEMの手法を用いて問いに対する洞察を深めていくというものである。一人
のマインドで孤立して考えあげていくことが「研究・探究」なのではなく、
フェレール氏は、ボディやハートに問いかけながら、絵を描いたり、踊った
り、瞑想する中で、探究を深めていくという「調査方法」を提示しているの

である。

また、フェレー氏が参考文献として頻繁に引用する研究者に、J. Heronがいる。*Co-operative inquiry : Research into the human condition* (1996) に始まる彼の一連の著作をみても、現在、「知の構築」のパラダイムが、「参与的に」そして「協同的」に変わってきていることがうかがえる。これも、私に安堵感を与えてくれるよりどころの一つだ。私たちは、今、‘おたがいの間にある知恵’ に、マインド以外のチャンネルを用いて、戻ってきているようだ。

前・産業社会、特に、非・西洋社会では、こうした手法の原型になるものが、地域の儀式をはじめ、随所にみられたのではないか、と思う。そこでは、また、地域共同体の問題を解決するのに、統合的なアプローチをしてきたことも想像にかたくない。マインド偏重や身体軽視は、産業社会以降の習癖だとも言えるのではないか。だとすると、現代西洋が、統合的手法を用いて回復しようとしているもののヒントは、前・産業社会の私たちの慣習や遺産の中にもあるはずだ。地球というコミュニティが未曾有の生態的、社会システムの危機を迎えている今、私たちは、古今東西の叡智をつないで、この危機を乗り切ろうとしているにちがいない。その一つのリスポンスとして、統合教育や「参与的提案」が生まれてきているように、私には思われる。

さて、これを日本の教育現場でどんな形で実践していけるのか。これは、今後の興味深い課題である。からだに注目する、という点では、日本には様々な実践がある。現代の代表格には、野口体操や故・竹内敏晴氏のアプローチなどの蓄積がある。「心身一如」の伝統を持った日本だからこそ、からだに対する感覚や理解は西洋にはない深みもあり、もともと東西融合の試みでもあるフェレー氏らの「参与的提案」に対しても、日本特有の寄与の道があるはずである。私自身は、ささやかではあるが、まず自分がどんな呼吸で教室、あるいは職場にいるのか、からだや声の緊張はどうか、ということに気付いている、というあたりから実践を始めている。かつて、私の「国際理解」の授業に、竹内氏の弟子で大学でも教えている高田豪氏にお越しいた

だき、「からだの中の海を感じる」というワークをやっていたことがあった。都会の生徒たちの表情やからだの輪郭がとけていったように感じたことが、印象に残っている。自分のからだの海や大地や風を感じられるように、働きかけていくことを忘れないでいること。そんなところから、フェレール氏らの試みと、私自身の実践がつながっていくのかもしれないと思っている。

存在のすべての次元で世界とかかわる。性やからだに対する私たちの理解が統合的なものになっていったら、また、知を育む上で、存在すべての声に耳傾けはじめたら、私たちの文化や社会はどんなふうにかわっていくのだろう。フェレール氏らの「参与的提案」が誘う未来の変容の可能性に、想像の翼を広げている。

文献

- Ferrer, J. N. (2008) . What does it mean to live a fully embodied spiritual life? *International Journal of Transpersonal Studies* 27, 1-11.
- Ferrer, J. N., Romero, M. T. & Albareda, R. V. (2005). Integral transformative education: A participatory proposal. *The Journal of Transformative Education* 3 (4), 306-330.
- Heron, J. (1996). *Co-operative inquiry: Research into the human condition*. Thousands Oaks, CA: SAGE.